

# 上平城跡

平成10年度 第1次試掘調査

調査概報

1999年3月

上伊那郡箕輪町教育委員会

# 序

箕輪町教育委員会

教育長 藤澤 健太郎

上ノ平城跡は、箕輪町大字東箕輪南小河内の東方山麓に所在し、山裾から西に延びた丘陵上に立地しています。

城跡は、昭和44年に長野県史跡に指定され、信濃源氏発祥の地として、箕輪町を代表する城跡の一つとして今日に伝えられてきました。また、地域には歴史に関心を持たれた研究者も多く、古くから調査が続けられて來たのであります。

平成9年には、南小河内に「上ノ平城跡地域活性化事業委員会」が組織され、城跡を含む地域の活性化事業への取り組みが始まられました。

箕輪町も、地域の皆様と協力し、その事業実施の一つとして、上ノ平城跡の整備・活用に向かって着手することになりました。

今後何年かの時間をかけ、事業を進めていくのですが、今年度は、その第一歩として、城跡の中心部の一部を試掘調査したのであります。本書は、調査の概報ですので、詳細な調査報告ではありませんが、郷土の歴史解明の一助になれば幸いと存じます。

今回の調査に際しまして深いご理解とご協力をいただきました地主の皆様、地域の方々、また、調査に直接従事されました団員の皆様に心より感謝申し上げます。

## 本文 目 次

序.....	教育長 藤澤 健太郎
本文 目 次	
挿図図版目次	
第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第1節 調査経過.....	1
第2節 調査組織の編成.....	2
第3節 調査日誌.....	3～5
第Ⅱ章 遺跡の環境.....	6
第1節 自然環境.....	6
第2節 歴史環境.....	7
第Ⅲ章 調査の結果.....	8
第1節 調査方法と結果の概要.....	8
第Ⅳ章 遺構と遺物.....	10
第1節 遺構.....	10
第2節 遺物.....	11
第Ⅴ章 試掘調査のまとめ.....	15

## 挿図図版目次

第1図.....	1
第2図.....	8
図版1.....	14

# 第Ⅰ章 発掘調査の概要

## 第1節 調査の経過

上ノ平城跡は、箕輪町大字東箕輪南小河内の東方山麓に所在し、山裾から西方に延びた丘陵上に立地している。

城跡に近い南小河内地区の人々は、城跡内からの出土遺物や、城にかかる伝承や歴史に深い関心を寄せてきた。

また、平成9年に同地区に「上ノ平城跡地域活性化事業委員会」が組織され、城跡を含む地域の活性化事業の取り組みがはじめられた。箕輪町は、それまで取り組んできた福与城跡の整備に加え、上ノ平城跡の整備活用にも着手することを計画した。これは城跡内の休耕地の荒地



第1図 位置図

化が進む状況にあることに加え、広く地域の保存活用の必要性を理解したためである。

今回計画した試掘調査は、今後の調査計画の基礎資料を得るためのものである。

試掘調査は、平成10年11月17日より着手し、12月2日まで発掘調査を実施した。引き続き出土遺物の整理を始め、調査概要をまとめた。

## 第2節 調査組織の編成

### 調査主体・事務局

#### 箕輪町教育委員会

教育長 藤澤健太郎

参 事 柴 登巳夫（箕輪町郷土博物館長）

主 幹 唐澤喜美子

副主幹 赤松 茂（学芸員）

主 査 柴 秀毅（学芸員）

### 調査団

調査団長 藤澤健太郎（教育長）

調査主任 柴 登巳夫

調査員 赤松 茂

〃 福沢 幸一

〃 根橋とし子

### 調査協力者

井沢はずき・泉沢徳三郎・市川俊男・井上武雄・井上隆次・遠藤 茂  
大槻茂範・大槻泰人・片桐 勇・桑原 鶴・後藤主計・田中忠男  
藤沢具明・伯耆原 正・洞口秋人・堀 五百治・堀内昭三・松田貫一  
宮下容子・向山幸次郎・山田武志・伊藤裕康・大槻貞夫・井沢行正

### 第3節 調査日誌

11月17日（火）くもり・雨

調査地区の確認、テントの設営、調査予定地内の雑木、雑草を取り除く作業。  
道具類の運搬、午後、雨になり寒さが加わり作業を3時で終了。



11月18日（水）くもり、時々雨

調査地区内の雑木、雑草の移動、トレーンチの設定作業。北からT1～T7までの設定。  
T3～T7の表土を取る作業から始める。数年間も荒地化が続いている、「カヤ」と藤つるが一面に覆っており、これを取り除く作業が大変である。



11月19日（木）晴、くもり

各トレーンチ内の表土を取り除く作業を進める。  
T7の西寄りに大石が初めて発見される。周辺に石が見られるようになる。各トレーンチ内から遺物が少しづつ発見される。



11月20日（金）晴、くもり

T7を拡張して面で調査を行う。拡張した範囲から平面を有する石が周辺からかなり発見される。

耕作により、平石は移動した状況のものが多い。列状に並んでいたと思われる状況のものも見られる。

11月22日（日）晴、くもり

各トレーンチの掘り下げを進める。各トレーンチから陶器片がかなり見られる。

伊那市教育委員会の飯塚さん現場に来られる。  
午後3時、井沢町長さん現場に来て下さる。

### 11月24日（火）晴、くもり

T7の西寄りの拡張区を下層に掘り下げる作業を行う。集石地区の清掃、写真撮影、平板測量を始める。T3の東端で、ローム面上に平石が据え付けられた状況で発見される、南側に拡張し、配列状況になっているか確認する。



### 11月25日（水）晴、くもり

午前9時30分、箕輪東小学校の児童5・6年生50名、城跡の調査を見学、教頭、担任3名同行、城跡と、遺跡調査について説明。

集石の測量、全体測量、各トレンチ、地層断面の測量、T3の拡張区で、礎石と見られる一列の配石が検出される。180cmの間隔で一列に並び、建物の礎石であろうと推測する。T2より石が多数発見される。平石が列状に並んでいる部分もあり、礎石と考えられる。ここを中心に一棟の建物があったことが考えられる。天目茶碗、内耳土器など出土。配石列の下(15cm)に平安時代の住居址が確認される。T2の拡張区にも同様に平安時代の住居址が確認される。

T7のトレンチ拡張区の中央部を掘り下げたところ、小石を敷いた状況で、配石が見られる。時期はいつになるのか今のところでは不明。



### 11月27日（金）晴、くもり

T2、T7の拡張区の集石の掘り下げ、T3拡張区の清掃、測量、各トレンチ断面図作成、T1は黒土層まで深く、当時の地形を推測する時にこの深さが標準になる。

黒土中より、縄文時代早期の土器片が出土。  
石鉢の破片出土。

本日で発掘調査は終了、測量と埋めもどし作業は後日。

11月30日（月）くもり

T1、T2の断面測量、平板測量を進める。



12月1日（火）晴

T1の断面測量、全体測量を行う。

12月2日（水）くもり

土層の調査、本日で測量終了。  
笛本先生、文化財保護課主事さん現地視察に  
来られる。

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

上ノ平城跡は、伊那谷の北部、天竜川の東、南小河内にあり、東方の山麓が西に張り出して丘陵となった突端に位置している。

南は字日向の平地を隔てて一の沢に至り、北は知久沢川が横を流れ、東は寺沢川の断崖で断たれている。西は、丘陵下から平地が続き、数百mで天竜川となる。

一の沢を過れば、長岡新田を経由して、諏訪地方に至ることができ、この道筋は、古く縄文時代より交通があったことが、これまでの発掘調査などで知ることができる。

上ノ平の地域一帯は、後方に山を背負い、前面に広い天竜川の河岸平地を控え、北部伊那谷の入口を押さえるべく良好な地形と位置にある。

西南に傾斜した地形は、日当たりがきわめてよく、住居地としては最適であることから古く（縄文時代早期）から人々の生活の舞台であり、各時代の出土遺物によっても、その歴史を見ることができる。城をこの地に選んだのも当然のことである。



上空より遺跡を望む

## 第2節 歴史環境

上ノ平城跡を含む、歴史環境は、箕輪町内においても、その密度、歴史的古さ等、他の追随を許さぬ位置にある。その為、古くから地元の歴史家（大槻幹、井沢武雄等）により調査がされていた。また、上ノ平城跡を長野県史跡に指定するにあたり、下伊那の歴史学者、市村成人により、詳細な調査報告書が刊行されている。

先学の調査内容を中心に、それに若干の考察を加え一帯の歴史環境に触れてみる。

まず、城跡一帯からの出土遺物を見た時、一つの石器の発見が注目された。それは、城跡中央（本丸）のやや東寄りの地点から、神子柴型の石器（白質ケイ岩製）が発見されている。この石器の発見により、一帯の歴史を一気に、旧石器時代にまで、引き上げてしまった。一点のみの発見であるが、地形的にも、神子柴遺跡と共通するところがあり、この地に、旧石器時代の遺跡が在存するものと考えられる。次に大槻幹氏の収集資料の中にも縄文時代早期に平行すると思われる石器を見る事ができ、また、土器の中にも（早期天神山式）同時代のものが見られ、この地が、縄文時代早期から人々の生活の舞台であったことが証明されている。その後においても、各時代の出土遺物が見られ、この地が長く、人々の生活の場であったことが推測される。

さて、市村成人は、この城郭について、詳細な調査を行ない、次のように示している。

ここに居館を構えた武士は、伊那源氏の祖といわれる源為公である。為公は、源義家に従い、奥州での戦い（後三年の役1086～1088年）で功あり、それにより位を賜り、信濃守に任せられ、伊那郡領となってこの地に来たと考えられている。以後、約150年間ほどこの地に居り、その後に南伊那郡伴野庄（上久堅）に築城したと伝えられている。

地域一帯には、知久という地名や、日輪寺等の存在が往事を物語っているが、その間の歴史を伝える古文書などは皆無に等しく、城主一族の墓も不明である。この時期の歴史については、多くの先学によって研究されているところであるが、今後共に研究が必要な部分である。

また、城は、背面の防備のため、いくつかの砦や、山城が構築され、本城との関連を推定することができる。なお、城跡が往事の一時期のみのものであるのか、以後、後世において、順次、規模拡大しながら、整備されていったのか、今後の調査によるところである。

今迄の城の歴史は、ほとんど、為公の時代に結び付け、それ以後について考えられていないかった。しかし、戦国時代後半の箕輪の歴史を見た時、この地が、城として活用されなかったとは考えにくく、町内に数多く存在する城跡と同じく、何等かの形で、福与城との係を持ったのではないかという推測がされる。今回の試掘調査も含め、今後の研究を待ちたい。

箕輪町の古代・中世史の研究上では、この上ノ平城跡を含む一帯は、最大の調査対象地であり、この時代の歴史を明らかにする上での答えを持っている場所ではないかと思える。

今後大きな期待を持ちながら、周辺の歴史を掘り下げてみたい。

## 第III章 調査の結果

### 第1節 調査方法と結果の概要

城跡は、五条の堀によって、四ヶ所の郭に分けることができる。今回の試掘において、第一郭（本丸跡）を調査の対象としたのは、言うまでもなく、城跡の中心地であることと、土地を所有する方の協力が得られたことが、調査が実施できた大きな要因である。

10月中に畠地一帯に繁茂した雑草刈る作業を実施し、草が枯れるのを待って調査範囲を決定した。第2図に示すように第一郭の中心約2300m<sup>2</sup>を調査対象に設定した。

調査対象地の北端から巾2m、長さ36m余のトレンチを7本設定しようというものであった。調査地区北東の角に、雑木があり、一部調査地区が南へ寄った形となり、トレンチも7本設定する形となった。

調査対象地の範囲は、何年かの間、雑草が自由に伸びた状況下にあった為、藤のつるが全面



第2図 トレンチ設定図

を覆う様相を呈し、表土10cm程度の排土が最も大変な作業であった。

この為、表面の藤つるを取り除く作業のみ機械を使うことにし、以下は、すべて手作業のみにて掘り進めるようにした。

調査は、本丸の中心部において、城跡に直接結び付くような遺構、遺物の発見に注意が向かれた。また、以前から存在が予測されていた井戸の位置確認も、期待された一つであった。

また調査以前から城跡の歴史、そのものに対する疑問として、為公に関する城の歴史が伝えられて来たが、為公以後における城跡の歴史はどのようなものであったのか。

このことも注目される大きな問題点であった。遺構・遺物については後述するが、出土遺物から見る限りでは、本命とされていた為公の時代（12世紀～13世紀頃）と平行する遺物は、ほとんど検出されなかった。

最も多く見られた遺物は、16世紀前半（室町時代後期）のものばかりである。

トレンチの設定状況は、面積的には全体の2～3割であるが、中心部のほぼ全域に及んでいる為、概要は推定できる。

のことから（遺物の時代）見ると、為公が、着任してすぐに本丸である第一郭に城郭を構えたのか疑問になる。今後の調査を通じ、投げかけられた大きな問題点の一つである。

第二として、遺物の多くが16世紀前半であり、検出された礎石列は、この時代に平行するのではないかと考えられている。為公以後についての城に関する歴史は伝えられていないが、遺構、遺物の状況を見た時、16世紀前半を中心とした時期に、建物の存在と共に、人々の生活があったと考えたい。

それは、福与城の藤沢氏を中心として、武田との戦いの時期と平行する為、この時代に上ノ平城跡に位置したと推定される武将も、藤沢氏との関係があったのではないか。しかし、町内に位置したいいくつかの城（福与城の支城）は、記録等に伝えられているが、上ノ平城跡については、記録、伝承等全く無い状況である。

今回の試掘調査は、本丸跡の一部を掘っただけで、城跡全体についての推定など、とてもできないが、今後の調査によっては、城跡についての歴史が、何カ所か、書き改められると予測される。

## 第Ⅳ章 遺構と遺物

### 第1節 遺構

#### 集石 - 1

T-7の西寄りの部分を拡張し、一部面的な調査を実施した。この位置に集中して石が検出された。この範囲を集石-1とした。

表土から20~30cm程度掘り下げた時点で、石の顔が発見され、以後次々と顔を出し始めた。石は、一面に平面を有し、40~70cm程度の方形を呈するものが、多く見られた。

それ等は、建物の礎石ではないかという考え方で調査を進めた。形状、大きさは礎石として見た時、適当と思えるが、以後の耕作（主として長芋栽培）で、平石はほとんど動いている状況にあった。しかし、中には、移動していないと見られるものも残っており、また移動後からも、配列状況を残している石もある。このことから、集石の範囲に見られる平石は、建物の礎石と推定した。また、集石範囲の中心部約4m<sup>2</sup>を一段低く（10~15cm程）掘り下げたところ、拳大の丸石が、敷き詰めたように並べられている状況が検出された。一部分のみの検出であり、どのような意味を持った遺構なのか、今後の調査により検討したい。集石の範囲も当然周囲に広がりを持っていると考えられ、また掘り下げることにより、今回現れた遺構より下にも、より古い時期の歴史を見ることができると推測される。

#### 集石 - 2

調査区北寄りのT-2の掘り下げ作業中、いくつかの石が検出された。深さは60~80cmとかなりの深さである。石は、ほぼ一定の大きさであり、この中にもいくつか、礎石として使われたのではないかと、推定できる石も見られる。中には、全く動いた様子はなく、平面を上にして配置したと見られる石もある。部分的な調査であり、検出された石も、



集石1 中央部一層下の配石状況

多くが動いていると思われる状況にある為、集石の内容を決定することは難しいが、一部移動していない平石の様子を見る時、集石の付近を中心に礎石を用いた建物の存在が推定される。この集石の下約15cmほどのところに、平安時代の住居址が検出された。集石は、平安時代の住居址が、廃絶した後の含土上に検出されている為、時代的移行は、はっきりしている。集石の中には、平安時代の住居址廃絶時に含土中に入ったと見られるものもある。この部分もトレーナー2の東端部を少し拡張したのみである為、遺構の性格を決定付けることは難しい。

## 配石 - 1

T-3の掘り下げ作業中に、平石（およそ30×50cm）が検出された。石の状況を見る時、全く動いた様子も無く、平面を上にして、配置したままである。その時点で、周囲をボーリング棒で、調査したところ、一定間隔（180cm）で列状に配石されていることが推定された。T-3の東端を約4m南へ拡張し、一列のみ、配石状況の検出を試みた。

推定通り、三個の平石が一列に検出され、間隔は180cm（一間）であり、レベルも全く平らで、まぎれもなく、建物の礎石の一部であろうと考えた。

この三個の平石の周囲には、縦・横に180cm間隔で石の存在が推定され（ボーリング棒での調査）一棟の建物が位置していたことが推定できる。検出された三個の平石中、最も北寄りの石は、平安時代の住居址の含土上に位置しており、ここでも、平安時代の住居址が、礎石例の下に存在している。



T2 東端集石状況

## 第2節 遺 物

### 土器・陶器類

試掘調査範囲内のほとんどから、土器・陶器類の出土があった。

#### イ) 織文時代の土器

城跡からは、以前に多くの織文土器が検出されていたが、今回の調査でも、それを裏付け

るよう各時期の土器片が発見された。

調査区北寄りのT-1の深い黒土層中からは、縄文早期（東海系天神山式）の土器片が出土し、早い時期から人々の生活の場であったことが確認された。また、縄文中期の土器片も見られる。この時期の遺物として、（故大槻幹氏発見）曾利期の埋甕がほぼ完形で、掘り出されている。

#### 口) 平安時代の遺物

前節遺構の部分でも記したが、調査区内からは、平安時代の住居址が確認されている。当然のことながら、住居址に伴う遺物として同時代の土師器、灰釉陶器が検出された。いずれも、平安時代後期（10世紀代）のものであり、住居址もその時代であろうと考えられる。

#### ハ) 室町時代後期（16世紀前半）の陶器類

この時期の出土遺物が最も多く検出されている。多いものとして、内耳土器（土なべ）を見る事ができる。調査区のほぼ全域に分布し、時期も、ほぼ同時代である。

次は、古瀬戸系の陶器で、灰釉丸皿、鉄釉茶碗、長石釉丸皿などが見られる。

また、他に常滑大甕、美濃鉄釉すり鉢、美濃菊皿、天目茶碗などが見られる。

#### 二) その他の遺物

中国からの輸入により伝えられたものとして、宗時代の青磁、明時代の青磁が少量ながら発見されている。また、鎌倉時代後期のものとして、古瀬戸灰釉おろし皿、大甕なども見られる。江戸期のものは、少量ながら瀬戸の染付茶碗も発見されている。

#### ・既出遺物について

上ノ平城跡について研究した地元の調査者では、大槻幹氏が第一人者である。氏は長く城跡周辺の調査を続け、遺物の収集にも務めた。石器・土器類がその大半であり、石器類は黒曜石を中心に縄文時代の早い時期に位置付けられるものが多い。

また、土器類も、縄文時代早期・中期を中心に、今回の調査によって発見されたものと、同時代の土器が保存されている。



T3 東端配石状況 (石の間 100cm)

### イ) 旧石器時代の石器

この石器は、昭和60年頃、当時中学生であった、町内の藤林正則君によって採集されたものである。

両端が欠損し胴部のみであるが、現長5.5cm、最大幅4.1cmを計り、器面は縁辺から加えられた剝離が施され、両面加工で丹念な調整が行われている。断面は凸レンズ状を呈し、残存胴部の形状から、全長は13cm前後と推定され、柳葉形尖頭器の一部と考えられる。



形状や剝離の状況は、南箕輪村神子柴遺跡出土の尖頭器とよく似ており、石質は、白質ケイ岩であろう。一点の石器ではあるが、今後の調査に重要な意味を持っている。

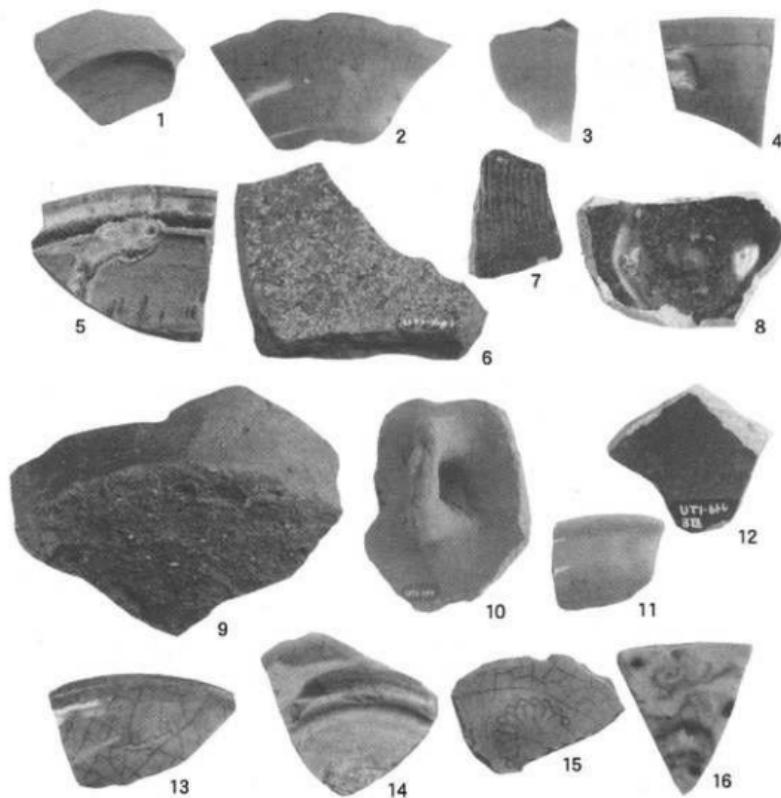
### 2) 金銅製誕生仏



第一郭のほぼ中央付近から出土した像で、地主で、発見した大槻家に保管されている。

像は、右手の一部と両脚の大部分を欠損しており、現高約7cm余である。作風から見て、製作された時期は奈良時代も早い頃ではないかと言われている。純銅造で、表面は塗金されていたのではないかと推定される。

伊那谷では唯一の誕生仏であり、仏教伝来と合せ、この地方の仏像彫刻の最も古い例として注目される遺物である。



図版1 写真図版説明

1	2	3	4
灰釉陶器 平安時代後半	青磁輪花鉢 明時代	青 磁 宋時代	青磁碗(買入) 明時代
5 古瀬戸灰釉おろし皿 鎌倉時代	6 古瀬戸大甕 鎌倉後期	7 美濃铁釉すり鉢 室町後期	8 美濃天目茶碗 室町後期
9 常滑大甕 室町後期	10 内耳土器(土なべ) 室町後期	11 長石巻碗 江戸時代前期	12 古瀬戸鐵釉茶碗 室町後期
13 古瀬戸長石釉丸皿 室町後期	14 古瀬戸灰釉丸皿 室町後期	15 美濃菊皿 室町後期	16 瀬戸染付茶碗 江戸時代

## 第V章 試掘調査のまとめ

上ノ平城跡は、伊那源氏発祥の地として、城跡一帯は、長野県史跡に指定されている。伊那源氏の始祖である為公が最初に居住した場所とされ、江戸時代以来、多くの研究者によって調査されてきた。

下伊那の歴史学者市村成人氏は、それまでの調査に加え、この地を長野県史跡にするに当つての調査を実施し、為公の居館の地を上ノ平と推定し、以来今日まで、定説とされている。

上ノ平城跡の試掘実施に及ぶ経過は前述（本文）のようであるが、箕輪町の古代史を始め、広く伊那地域全体から見ても、重要な地であり、また、不明なところが多い城跡であるため、調査・研究が必要とされていた。

平成9年、地元が中心となり、城跡周辺の地域活性化事業が立案され、そして上ノ平城跡の整備活用を進めることを計画した。今回実施した試掘調査は、今後の調査計画の基礎資料を得るためのものである。

調査の結果についても前述したが、新たな歴史が推定されることがいくつか考えられる。

調査の範囲が第一郭の中心部でわずかな部分であることと、掘り下げる深さも、平均50~60cmで留めたこと、またトレンチ掘りであり、面の調査はしていない。

このような状況での調査であるため、一部分の内容のみの結果であるが、遺構・遺物の状況から推定されることを記してみたい。

- 1) 城跡が形造られた時期や、形状等については、調査の範囲が、そこまで及んでいないが、検出された遺物の多くが、室町時代後期（16世紀前半）に集中したことは、この時期に、城跡一帯に人々の生活があったことの現われであり、城跡の歴史に加えられる新しい部分である。
- 2) 平安時代を中心に、一帯が大きな集落であった可能性がある。今回のトレンチ範囲内だけでも2~3戸の住居址を確認している。丘陵全体に同時期の住居址が存在するようなことが確認されれば、藤原の牧や郷との関連に新たな歴史が推定されることも考えられる。
- 3) 地下遺構として、この地を耕作した方の話として、等間隔に石が存在していると伝えられていたが、調査により、その状況が現われた。移動していない配石遺構が検出されたことにより、礎石を用いた建物の存在が考えられる。その時期を何時にするかは、今後の調査によって決定したいが、今回の状況を見る限りでは、室町後期の遺物と平行するのではないかと推測される。
- 4) 今迄の上ノ平城跡に関する歴史は、ほとんど、為公に結び付けられていたが、今回の試掘調査の限りでは、同時代（12~13世紀）の遺物はあまり見られない。（調査の深さが浅

いとも考えられるが）主郭である第一郭が城郭の中心であると考えられるが、為公の時代と平行する遺物が少くないのが不思議である。

5) 既出遺物ではあるが、旧石器時代のポイントと推定される石器の出土があり、今後の調査計画にどのように位置付けるのか、検討しなければならない問題である。

今回の試掘調査の結果を踏まえ、今後の調査と、整備・活用計画の検討をしなければならない。

終りに、調査実施に当たりまして、ご協力下さいました地元の皆さん、上ノ平城跡地域活性化事業委員会の方々、南小河内、調査実施をご快諾下さいました地主の皆さん、そして、大変寒い時期にもかかわらず、調査を進めていただいた、調査団の方々に心から御礼申し上げます。